

視察・研修報告（復命）書

三次市議会議長 様

報告者氏名 増田 誠宏

下記のとおり、視察・研修が終了したので報告します。

会派代表者氏名 掛田 勝彦

経理責任者氏名 増田 誠宏

期 間	令和 7 年 2 月 1 日（土）
用 務 先	サテライトキャンパスひろしま 広島市中区大手町 1－5－3
用 務	広島県教育委員会 【個別最適な学び探求セミナー】
概要及び所見 （目的、参考 にすべき事 項、提言、活用 策等）	【概要・抜粋】 ・鳥取県立精神保健福祉センター所長 ・不登校ジャーナリスト ・NPO 法人青少年交流・自立・支援センター ・広島県教育支援センター(SCHOOL “S”)センター長 1. 安心できる環境について 不登校や引きこもりの子どもにとって安心できる環境が重要である。特に、不登校を解決するために無理に学校へ行かせようとするのではなく、まずはエネルギーを回復させることが必要である。一ヶ月ほど何もせずに休ませることで、精神的に安定し、それが回復のスタートラインになる。また、家族も「やらなかった後悔」よりも「やってしまった後悔」の方が深刻になることが多いため、子どもが SOS を発している時に気づき、適切に対応することが大切である。 2. 不登校の現状と社会とのつながりについて 文部科学省の調査をもとに、不登校の児童・生徒数が急増している現状を説明した。特に小学生の不登校は 5 倍に増加し、文科省も注目している。調査では、55%の親が「子どもから学校に行きたくないと言われた」と答えており、学校側から必要な

情報提供がないため、不安を感じている保護者も多い。さらに、不登校の子どもを持つ親の5人に1人が離職を経験しており、特にシングルマザーは仕事を休まざるを得ない状況に追い込まれることがある。

また、不登校の理由については、児童本人と教員の認識に大きな乖離があると指摘した。特に、いじめ被害を訴える児童が多いにもかかわらず、学校側は「みんな仲良くしなさい」と取り扱われないケースが多い。その結果、子どもは学校に対して不信感を抱き、体調不良を引き起こすことがあるという。HSP (Highly Sensitive Person) の子どもたちは音に敏感であり、特に先生の怒鳴り声が精神的なダメージとなることもある。

さらに、学校とのつながりを維持することが重要視される一方で、親子ともに「学校とはつながりたくない」と考えている場合もあるため、サードプレイス（学校や家庭以外の居場所）の重要性が高まっている。

3. 引きこもり支援と社会復帰へのアプローチ

広島ひきこもり相談支援センター西部の取り組みについて、現在、毎月約10件の相談があり、以前は青少年の問題と考えられていた引きこもりが、現在は「8050問題」として社会的に深刻化している。相談の大半は電話やメールで行われ、その後訪問相談や同行支援に発展することが多い。

また、引きこもっている人の中には「話したい」と感じている人もおり、場があれば饒舌に話すケースも多い。特に、自分の話を聞いてもらえる人がいることが重要であり、「これからどうする？」と聞かれると黙ってしまうが、雑談には積極的に応じる傾向がある。

広島市のフリースペースでは、様々な人が集い、交流の場として活用されている。地域活動支援センターⅢ型の制度を活用し、医師の意見書があれば交通費が全額補助される仕組みがあるが、診断不要で利用できるのが理想的である。

引きこもりのケースは千差万別であり、不登校とは異なり、学校を卒業した後も長期間引きこもる場合がある。そのため、社会との接点を失うことが大きなダメージとなり、経済的な問題や家族の高齢化による影響も深刻であると指摘した。特に、親が理解を示し、子どもに対する無理な圧力をかけないことが重要である。

4. 家庭での子どもへのサポートについて

不登校の子どもが回復するためには、まずは「ゴロゴロする時間」が必要であり、自分のペースで過ごせる環境を整えることが大切である。精神科医が監修したチェックリストを活用することで、親や学校側が第三者的な視点で子どもの状態を判断しやすくなる。

子どもの表情や目の動きに注目し、短い時間でも「今日はどうだった？」と話しかけることを習慣化することが重要である。親が子どもを学校に行かせたい気持ちを持つのは当然だが、一度は学校に行かせてみて、子ども自身の反応を見極めること

が必要である。

5. 学校との関わり方

小学校 6 年生の 3 学期に無理に登校させるよりも、新たな環境で新たなスタートを切る方が良いケースも多い。エネルギーが回復してから新学期を迎える方がスムーズに適應できることがあるため、無理に登校を強制するのではなく、状況を見極めることが大切である。

6. ゲームとの向き合い方

子どもがゲームやスマホに熱中するのは、現実世界が辛いためである。親が「ゲームをやめなさい」と言うよりも、なぜゲームに没頭しているのかを理解することが重要である。

7. 保護者のサポート

親自身がケアされることが重要であり、孤立感を防ぐためにも自分の時間を持つことが必要である。

8. 質疑応答

参加者から不登校の子どもへの具体的な接し方や、学校との連携方法についての質問があった。登壇者は、「無理に学校復帰を急がせず、子どもが安心できる環境を優先することが大切」と強調した。また、保護者自身が相談できる場を持つことの重要性についても言及があった。学校側の対応については、「先生によって理解の度合いが異なるため、信頼できる教員や支援団体とつながることが有効」とのアドバイスがあった。

【所見】

不登校や引きこもり支援は、学校復帰を目的とするのではなく、まずは本人が安心して過ごせる環境づくりが重要である。

本市においても、家庭・学校・地域が連携し、本人のペースを尊重した支援体制の整備が求められる。

特に、サードプレイスの確保や保護者への支援強化は喫緊の課題である。柔軟な関わりや、支援者の理解促進、介護休業など既存制度の有効活用とともに、社会とつながりにくい人の気持ちに寄り添い、安心できる環境を保障する姿勢が重要である。本セミナーは、支援の在り方を改めて考える機会となった。

